

創学舎ニユース

No.237

世界が敵に

まわった日(その5)

まずは前回までの要点を整理することから。私は、小学校に入学していじめにあい、不登校になったこと。

何回か意識を失い、小中の九年間病院通いで、薬を飲み続けたこと。そして、いつか死の予感がめばえていたこと。

以上の事情により、弱虫でビクビクした生活をしてきたこと。

中学に入り、勉強や運動をがんばり、心の平安を得たこと。

私を支えてくれた人達が、大勢いたこと。(担任、中学の先輩、母etc)

私の人生も半ばを過ぎたのだろうが、私を支えてくれた人達のこと、一時も忘れたことはない。まさに、彼らのおかげで私は生きてこられたと思う。ただ、私は無精な人間で、彼らに感謝の気持ちをきちんと言えてこなかったし、その中の何人かは、すでに物故者になった方もいる。(後悔してもきれないが...)。これから、できるだけ早く彼らへの恩返し(返せるものではないが)と、墓参りを果たしたい。さて、私にとって大切な人の中でも、母と亡

き祖父は別格である。この二人のことを少し述べておきたい。母子家庭だったので、同居している祖父(母方)はまさに父親代わり。この二人には、本当にたくさん愛情を注いでもらった。(父とは一度しか会っていないが、憎しみの感情は一度も抱いたことがない。彼との別れのシーンは私の記憶の中に強烈に刻まれていて、彼が私達を大切に思っていたことには何の疑いもない。)母は、幸いにもまだ元気で暮らしているが、私と弟が一人立ちするまでは苦勞の連続であった。何といっても、私の病弱さは、彼女の心を悩ませたはずだ。小学校にあがる前は、こんなことが日常茶飯事だったらしい。

私が病気になる。(そういうときは、弟も同じ病気になることが多かったそうだ。)生活保護をうけているので、医療費はかからなかったが、交通費がない。そこで、二十キロほど離れた病院に行くための交通費をこつやつと捻出したのだ。祖父は、花を作るのがうまく、一年中何かしらの花を栽培していたが、その花を切り両手に抱えて家を出る。母が弟を、祖父が私をおぶって、二十キロの道を花を売りながら歩くのである。往復のバス代が得られた所でバスに乗る。売り残した花があれば、病院に差し上げる。当然、私にも弟にもこの時の記憶はないのだが、その話を聞いて、何度も何度も私はその場面を想像した。いつか、私の心の中では、一

編の物語として成立してしまった。(以下次号)

(小林)

受験生へ...

挫折したかい

暑かった夏も、強い決意をして挑んだはずの夏休みも、振り返ってみれば余り成果が上がらず、失意と不安を抱えて始業式を迎えた人も少なくないだろう。そういう人達に一言。

きみ達は、この夏だけでなく今までも何度かチャンスを生かせずにきた経験をしているはずだ。そう、この夏に限ったことではない。ただ、違つのは、この夏をうまく乗り切れなかった後悔が今までになく大きいということだ。そうだろう。とすれば、きみ達は、まだ救いがあるし、まだ見込みがある。これは、慰めではなく本当のことだ。だから、これから述べることを読め。しっかり読め。

そもそも何故苦しんでいるかといえば、きみ達が受験を志したからだ。そして、「高校へ行きたい」、「大学 学部に行きたい」とあこがれをもったからだ。そして、そのためにも、「夏休みは頑張るぞ!」と決意したからだ。その志もあこがれも決意も今までになく強いものだったはずだ。結果がうまくいかなかったとき、志やあこがれや決意が強かったときほど、失意も大きくなる。今のきみ達はまさにそれに該当

するのだ。(結果が良くなかったことについては、後述するが。)そして失意が大きいことはきみ達の思いが大きい、少なくとも大きくなりつつあるということの証明なのだ。大きな失意を感じる事ができるほどきみ達が変わったことの証明なのだ。だから見込みはあると書いたのだ。そして、実際の話、まだ間に合う。本気でやれば時間もチャンスも十分にある。

さて、結果が良くなかったことについては、冷静に分析をし、十分に反省をしなければならぬ。各自きちんとやること。そして二度と繰り返さないように。

参考までに、成功するための知恵を述べておく。「やる気」は行動することによって成長する。とにかく行動あるのみ。小さなことでも、毎日続けること。続けることの威力はすさまじい。常に目標を明確にすること。何をいつまでにやるか、どこを受けるかを含めて、目標を定めるのだ。リズムを守ること。一度に多くの科目をスタートしないこと。核となる二、三科目がうまく流れないうちは、手を広げると失敗する。信頼すべき助言者がいればその忠告は素直に受け入れること。どの科目も体にしみ込むまで繰り返すこと。しみ込んだことだけが、得点となる。(小林)

教育「名言」の紹介(12)

事物が実体で言葉は属性です。事物が体軀で言葉は衣服です。事物が核心で言葉は殻であり外被です。

《出典》ヨハン・アモス・コメニウス(チェコ・一五九二—一六七〇『大教授序』)

解説 素直に読むと、この文章ではいくつかの二項目を単純に対比しているように見える。事物／言葉、実体／属性、体軀／衣服、核心／殻・外被 という対比である。結論的にコメニウスが強調しているのは「事物」である。しかし、ここで言う「事物」は、自然・人事の無形の現象を指していることである。

コメニウスはこの箇所では、旧来の教育のあり方を念頭において論じている。テキストの暗記ばかり強いられた体験もベースにある。権威あるモノとして崇められていたのに、テキストにはたくさんの注釈や解釈がなされ、人々はオリジナルな作品を読まないで、注釈書で間に合わせようとする。そもそも、どんなテキストも人間のイメージを、人間の行為と型を取り扱っている。だから、注釈や解説よりも、人間が人間に対してきたコトを正視せよ。

コメニウスはこの喪失と不信の時代にあつて、「モノコト」にじかに向き合うことは重要な営みであると強調し、三点にわたって「事物主義」を展開する。

第一に、何をいかに読み直すべきかを示す。

「事物」の数は無数である。新しい「事物」も絶え間ない。どうしても選択が必要になるが、その選択眼をどうやって養つか。教育は、過去の膨大な、入り組んだ遺産の中から、特に直接いやおうなしに現代に訴えかける作品を、明るみに出し支持する。

第二に、教育は仲介者の役割をすることができ。教育は、過去と現在の間に対話を成り立たせようと努めるのと同じく、様々の言語と言語の間に接触が起こるように努力する。教育は、感受性の地図を拡大し、精密にする。教育は、多くの言語的、民族的交流の中に生きている。

第三に、教育は現代の教育に対して判断を下す。現代と目先の今日とは違う。今日の教育は、人々に満足を与えているか。この教育が提出している人間をはかる尺度は何か。そういう疑問は簡単に設定できるものではないし、どう巧みに問うても期待は満たされまい。だが、この時代は普通の時代ではない。伝統的な価値の世界が破壊されてしまったのだから、言葉そのものがねじ曲げられ安っぽくされている。古典的な表現や隠喩が過渡的なものに席を譲りつつある。読み方の、真の読み方の技術がもう一度つくり直されねばならない。(アガトス教育研究所)

受験はチャンスだ

この夏、モルディブに行ってきた。小さい珊瑚礁の島で、海が素晴らしい所だ。ゲストはヨーロッパの人が多く、一番多いのがドイツ人、次がイタリア人、その次が日本人だろうか。海以外何もない島で、日中の過ごし方は人によって様々だ。面白いことに、国民性の違いから夕方日が沈むまでビーチでのんびりしているのはほとんどがイタリア人、ダイビングをガンガンしているのはドイツ人、夜のディナーに着飾ってくるのはイタリア人…。こんなに見事に違つものか、と考え込んでしまふ。ということは、我々日本人も同じようにいわゆる「日本人」という枠があるのだろうか。

海外に行くと、こんなことでも色々なことを考えさせてくれる。そして、いつも感じることは、自分の視野がいかに狭かったか、自分はいかに小さかったか、ということだ。残念ながら、私のような凡人は、普段頭では理解したつもりになつていても、目の当たりにしないと実感をもって感じられないようだ。

しかし、自分が小さい存在であつた、と実感することは悪いことではない。むしろ良いことなのだ。自分とは感じ方の違つ人がある。こういう時間の使い方もあつたのか、なるほど。自分の使い方はせせこましい使い方だったな…などという思いが、自分を一回り大きく成長させてくれる。自分の考えを肯定し、守るだけでは新しい成長はない。そのまま凝り固まつてい

くだけだ。スポーツでも同じだろう。「しまった、ミスをした」と思えば、次にはミスをしないようにと練習する。何度か何度も練習する。そして、ミスを克服する。この繰り返しで上手くなり、強くなる。

そう考えると、自分の弱さ、小ささを感じさせてくれることは、大変ありがたいことなのだ。そして、「受験」もまた、その一つである。問題を解く。なかなかできない。教えてもらつた。がすぐ忘れてしまふ。また解答を読んで考える。やっと解ける。繰り返し、繰り返し、解く。今度は自力で解ける。うれしい。これは小さな一歩だが、確実に自分を大きく、強くしてくれる。

よく「人間は無限の可能性をもっている」と言われるが、この繰り返しが無限の可能性につながっていくのである。だから、逃げてはいけな。逃げては、自分の弱さを実感できない。先送りするだけだ。弱さを実感できなければ、成長できない。

そう、「受験」は成長するチャンスなのだ。そんなに嫌がるものでもない。そう思つて、気楽に、真剣に、全力で取り組んでみよう。(大場)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料で送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。